
勇者の道のり

継続

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

勇者の道のり

【コード】

N3375C

【作者名】

継続

【あらすじ】

男は勇者だ。世界の命運を絶とうとする魔王を倒すべく、旅をしている。

(前書き)

初の企画小説に参加しました。緊張しています。
「五分企画小説」で検索すると、他の先生がたの小説も読めます。

男は勇者だ。

それは、誰がなんと言おうと決して曲げられない事実であり、必然である。勇者は、世界の命運を絶とうとする魔王を倒すべく、旅をしていた。

左の手には、この間救ったばかりの王国から贈られた、水晶の盾。勇者は、これを王から授かった時、それまで持っていた炎鏡の盾を、「弱いから」と惜し気も無く武具屋へ売った。

右の手には、光の魔城を落とした時に見つけた、光剣。この剣をじっと見つめる度、勇者は、これを守っていた金光のゴブリン達を思い出す。全員が金塊のような出で立ちで、直接光を受けずとも、太陽のようにまばゆい輝きを放っていた。

勇者が、草原に道しるべのように出来た細道を歩いていると、やがて小さな村が見えてきた。

「はあ、ようやく、休めるか」

と、気を緩めた、その時。勇者とその周りを、巨大な影が覆った。上空から、不死竜が現れたのだ。

ちっ、と呟いた勇者は、右に持つ剣に力を込め、かざした。すると、青空が急に、神秘的な光に包まれ始めた。勇者が最大呪文を唱えたことを知った不死竜は、体をくねくねさせながら、それから逃げようと右往左往した。

前に見えていた風景は、徐々に光に飲み込まれていき、残ったのは勇者と不死竜だけとなった。そして、勇者は言った。

「わがままな女神達」

その瞬間、光のあちこちから、巨大で、しかしどこか品のある腕が、十数本飛び出してきた。そしてその手は、逃げ惑う不死竜の体を掴み、まるで取り合うかのように、不死竜を自分のほうへと引き

込もうとしている。

やがて、ビリビリという不吉な音とともに、不死竜の体が四散した。巨大な腕々は、不死竜の体の一部を握り締めたまま光の奥へと消えていき、その光もやがて溶けるように消え去った。

力を使い切った勇者は、村へと歩みを進めた。

「実は、この村から少し西に行った先に……」

「ああ、ああ、みなまで言うな。どうせ、この村の祭壇かなにかがある洞窟に、魔物が居座っているのだろう。行って倒してみせよう」

「おお……さすがは、勇者様じゃ。我々の言いたいことを、ずばりと言い当ててくださる」

なに、一夜の宿の貸しもあることだ、この村長の頼み、聞かないわけではないだろう。

勇者は退屈そうにそう思うと、村人達の期待の声を背にしながら、村を出た。

剣をブラブラさせながら歩いていくと、なるほど、先の空に黒いドクロが揺らめいている。それが魔王によるものと知っていた勇者は、極速を使って、洞窟の前にあつという間にたどり着いた。

洞窟の中から感じる強烈な邪気は、漆黒の煙へとその姿を変え、もわもわと入り口周辺を覆っていた。人がそれに触れれば、10秒もしない内に、心をその漆黒に染められてしまうだろう。勇者は地面を見つめ、呟いた。

「大地の光」

地面が割れ、隙間から巨大な槍が洞窟目掛けて飛び出してきた。

光の放物線を描いているそれは、音速をとくに超えており、勇者が再び洞窟へ目を戻した時には、邪気を完全に打ち砕いてくれていた。勇者は再び極速を使い、途中に待ち構える敵の群集を吹き飛ばし

ながら、洞窟の最深部へ一気に移動した。

祭壇のあるところに着いた勇者は、そこにある強烈な気配に身構えた。

「これはこれは、勇者様。いかなさったか」

松明の作った影から、スマートな格好をした魔物が出てきた。全身に、にぶく光る紫の鱗をまとっている。

「やい、貴様が魔王か」

「ご冗談を。あの方とわたし如きを見違えるなど、無礼なヤツだ。

我は魔王直属部隊27隊隊長、ダークパープルなり」

勇者は落胆のため息を吐いた。

「覚悟！」

ダークパープルはそういうと、頭に生える小さな二本の角から、紫色の雷を発射して攻撃してきた。勇者はそれを華麗なステップでかわすと、地面を蹴ってダークパープルとの間合いを詰める。同時に、剣を相手に突き刺させるように、右腕を前に出した。

ぐにゃ、という感触で、剣がダークパープルに刺さったのがわかった。

「かかりましたね！」

勇者のまえにいたダークパープルが石化して、剣が抜けなくなつた。その後、周りにいくつものダークパープルが湧き、武器を使えなくなつた勇者に向かって勝利の雄叫びを上げながら、角から電撃、手の平から魔球を繰り出す。

しかし、勇者は笑っていた。

「全知全能の追跡者」

勇者がそう言うと、ダークパープル達が見えない何かに押しつぶされていった。雄叫びが徐々に消えていき、勇者に向かって発射されていた雷も魔球も、同じように押しつぶされていった。遠くから、

他の魔物たちの悲鳴が聞こえる。

「この魔法は、相手に剣が触れることで発動する。その魔物が撒き散らした邪悪なものを、すべて取り除くのだ」

目の前の石が、柔らかい音を立てて崩れ落ちた。地面に触れた石のかけらは、その姿を砂へと変え、この戦いの終わりを告げていた。

男は勇者だ。

それは、誰がなんと言おうと決して曲げられない事実であり、必然である。勇者は、世界の命運を絶とうとする魔王を倒すべく、旅をしていた。

勇者はこれまで、1000の村、500の町、300の王国を、魔王の魔の手から救ってきた。武器は救う先々で、次々と強いものへと変わった。「村に古くから伝わる……」「遺跡でそんなもの……」「王家の家宝……」。呪文も旅を重ねることにさらに強くなり、いまではその強さに敵がついていけない。

……それなのに。

それなのに、魔王は、その痕跡を世界の各地に残すだけで、ろくに姿すら見せない。勇者は果ての見えないこの旅に、魔王を倒すという使命感をいつの間にか捨て、ただなんとなく旅を続けていた。旅をやめたとしても、もう生まれたふるさとすら覚えていないので、帰ろうにも帰れないが。

深いしわの刻まれた手に握られる、最強の剣をじっと見つめる。先程救った村の祭壇に祭られていたものだ。

……最強の剣、ねえ。まあ、どうせ次にいくところで、これよりも強いのが出てくることを予測するのは、実にたやすいことだ。

(後書き)

作中に出てくる造語は、全部オリジナルで書いてるつもりです。なんかと被ってたらごめんなさい。

個人的には、前半うまくまとめられてなくて、後半がまあまあ……ですかね。難しいですね、文字に制限があるのって。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3375c/>

勇者の道のり

2008年8月29日18時03分発行